7279

日本建築学会大会学術講演梗概集
(北　陸)　1992　年　8　月

大英帝国のインド新帝都計画に関する研究
その2：近代都市計画史のなかでの意義

正会員 ○　本江正茂

■1.研究の対象と目的

本稿の目的は、大英帝国によるインド新帝都ニュー・デリーの都市計画を近代都市計画史、とりわけ首都計画の歴史のなかに位置づけることである。戦後の盲目的反省が冷静な評価を妨げてきたために、帝国主義時代の建築・都市計画は無視され続けてきた。ニュー・デリーもまた20世紀最大の都市計画の一つでありながら、ほとんど言及されることのない都市であった。

その個別的内容に関しては前回発表している。

■2.方法

1.　都市空間のモデル化

以下に挙げる都市の空間構成について図式化を試みるべく、モデルの抽出をおこなった。

まず「レイアウト・パターン」として計画全体の平面のパターン、とりわけ道路線形をとりあげた。抽出したタイプは次の3つであるが、殆どの場合純粋なひとつのパターンではなく、複数のパターンの組み合わせでできている。

《中世》：ヨーロッパ中世都市にみられる非幾何学的で迷路的なパターン。

《グリッド》：直交を基本とする格子状の道路パターン。グリッド中の各点が均質なものとしてとらえられている。

《放射》：なにがしかの特権的な中心から放射状に道路が延びているパターン。

ついで「街路と建築の関係」では、計画の街路断面形式をとりあげる。簡潔なモデルをつくるため、アーバンファブリックを形成する標準的な街路において道路境界線上に建築のファサードがあるか／後退しているかのみを判断基準とし、二つのタイプに分類した。

《連続ファサード》：道路境界線上に連続したファサードを持つタイプ。

《孤立》：ファサードが道路から後退し、前面および周囲に緑地を持つタイプ。

2.比較対象とした都市計画

ニュー・デリーはたんなる地方都市ではなく、巨大な帝国国家の首都として計画されたという特殊な出自をもっているので、ここで比較する対象もまた「首都」機能を付与されたものを選出した。各都市についてモデル化した結果をまとめたものが表1である。

計画名 (所在地, 設計年, 設計者)	レイアウト・パターン	街路と建築の関係	ニューデリーとの関係
ロンドン復興計画 (英, 1666, C. レン)	グリッド+放射	連続ファサード	英の首都イメージとして参照
ワシントンD. C. (米, 1792, P. C. ランファン)	グリッド+放射	連続ファサード	パリとともに原イメージとなる
パリ (仏, 1852, G. E. オースマン)	中世+放射	連続ファサード	同上
シカゴ (米, 1909, D. H. バーナム)	グリッド+放射	連続ファサード	
ニュー・デリー (印, 1913, E. L. ラッチェンス)	グリッド+放射	孤立	
キャンベラ (豪, 1913, W. B. グリフィン)	グリッド+放射	孤立	全く同時期、図集を参照
300万人の現代都市 (仏, 1922, ル・コルビュジェ)	グリッド+放射	孤立	
新京 (旧満州, 1933, 満州国国都建設委員会)	グリッド+放射	孤立	
大ベルリン計画 (独, 1937, A. シュペアー)	グリッド+放射	連続ファサード	孤立型を否定
チャンディガール (印, 1951, ル・コルビュジェ)	グリッド	孤立	コルブはNDを高く評価
ブラジリア (ブラジル, 1957, R. コスタ)	グリッド+放射	孤立	

表1：首都計画の都市空間モデル

A Study on The City Planning of Imperial Delhi
Part 2 : Significance in The Evolution of The Modern City Planning.

7279

Masashige MOTOE

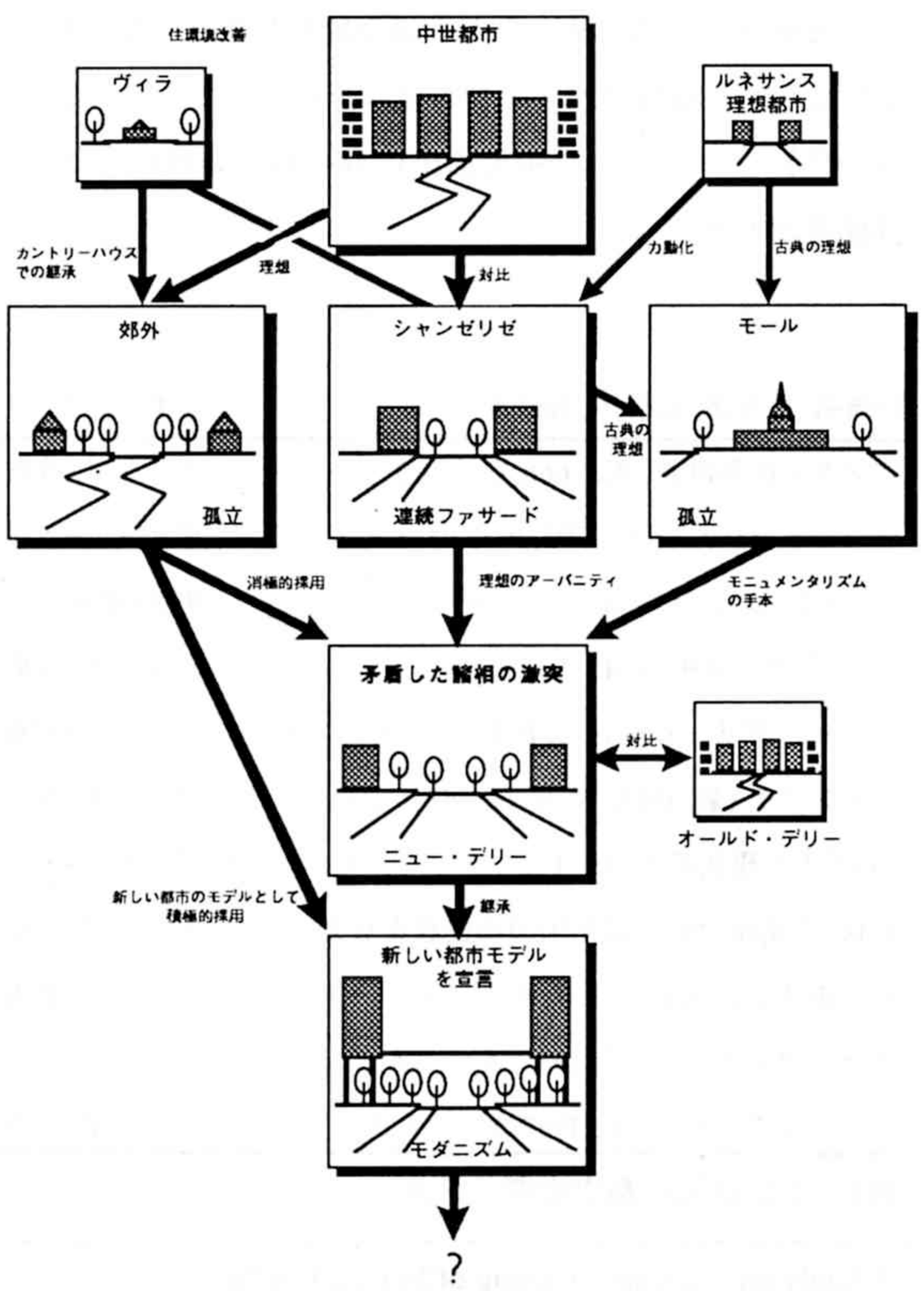
■3. 結論

「レイアウトのパターン」に顕著なのは、一貫して《放射》パターンが採用されていることである。首都計画とはその都市のみならず国家の再生とその新システムの表現として構想されるものであるから、城壁によって閉じられた迷路的なパターンに、もっとも鋭く対立する形式として真っ直ぐ放射状に伸びていく線形がとられるのであり、さらに国家システムのヒエラルキーの象徴として、中心と周縁が明快に表現される放射パターンが好まれるのであろう。ニュー・デリーの場合もまさに、シャージャハナバード(オールド・デリー)という隣接する既存の「中世都市」と対比的な都市をつくること、そして大英帝国による支配体制の求心性を象徴的に表現することの二つが課題となっていたのであり、《放射》パターンの採用は当然と言えよう。

「街路と建築の関係」についてみると、19世紀と20世紀の計画の間で《連続ファサード》から《孤立》へのタイプの転換が起こっている事に気づく。ニュー・デリーはこの転換点に位置している。これには、ワシントンD.C.のモールが新しい都市美のモデルとなったこと、インドの苛酷な気候への対応に緑地が必要とされたことなどの理由があるが、計画の段階では、高いアーヴァニティをえるには、連続するファサードによって規定された街路が必要であると考えられていた。しかし、政治という単一機能に限定されていたニュー・デリーには、シャンゼリゼのような街路空間を創りだすだけの建築は必要なかったし、また予算もなかった。こうした現実の前にシャンゼリゼのような街路は断念され、妥協の結果として緑の拡がりのなかに孤立する建築群によって都市空間がつくられたのである。

この緑の拡がりのなかに孤立する建築群によって構成されるという都市空間モデルは、田園都市を代表とする住宅地の開発に際して「郊外」という空間モデルとして適用された。田園の隙間の多い空間を維持しつつ都市的アクティヴィティを導入することによって成立した「郊外」は、19世紀後半から20世紀にかけて、都市近郊において都市空間のモデルとなる準備をしていたのである。そして、「郊外」の空間こそが新しい「都市」なのだと開き直って宣言したのがモダニストの近代都市計画であった。「輝く都市」やチャンディガール、ブラジリアでは全面的かつ積極的に郊外モデルが適用されているのである。彼らはグリッドを基本に放射道路でアクセントをつけるというパターンは踏襲しつつ、街路と建築の関係に新しいモデルを導入することによって、新しい都市を創りだそうとしたのである。

ニュー・デリーは、都市空間のモデルとして「郊外」を採用した最初の首都計画のひとつである。しかし、その選択は消極的妥協的なものであった。クラシシズムへの憧れを捨てきらないまま、モダニストの開き直りに先駆けて、躊躇しながらも「郊外」モデルを首都という大舞台に全面的に採用してしまった曖昧さが、これまでニュー・デリーをなにか不純な、取るに足らない計画として無視させてきた原因ではないだろうか。ニュー・デリーは都市モデルの転換のはらんでいた矛盾と葛藤を抱え込んでいる。しかしだからこそモダニズムの限界が露呈しつつある過渡期の現代にとって学ぶべき点が多いのではないだろうか。



・東京大学大学院博士課程